「満洲国」建国忠霊廟と建国神廟の建築について

――両廟の造営決定から竣工にいたる経過とその様相――

津田 良樹

はじめに

神奈川大学21世紀COEプログラムの第3班「環境と景観の資料化と体系化」の海外神社跡地グループによる旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査は、2006年8月5日～14日にかけて行われた。そのなかで、当初は「満鉄附属地神社」ではないため調査予定に組み込まれていなかったのではあるが、旧満洲国神社跡地調査をやる上で、是非とも満洲国建国神廟および建国忠霊廟の跡地を確認しておきたいと思い立ち、急遽、両廟に立ち寄ることにした。なにせ調査の最終日で、あわただしく建国神廟・建国忠霊廟跡地を見てまわれたにすぎなかったのではあるが。

ところで、建国神廟は、満洲国皇帝溥儀が天照大神を祀るために帝宮内に建てた、日本における伊勢神宮あるいは宮中賢所に相当する満洲国の宗廟である。一方、建国忠霊廟は建国神廟の摂廟と位置付けられ、日本における靖国神社に相当する満洲国の廟である。

確認できた満洲国建国神廟跡地は、現在「偽満皇宮博物館」の敷地南東部の庭園のなかに石積みの基壇・礎石が整然と並ぶ状態で残されており、写真撮影を行うとともに、無許可ではあったが礎石の略実測を行った。一方、建国忠霊廟跡地は、一部では既に知られていたことではあるが、驚くべきことに中心施設がほぼ完全な形で残っていることを再確認した。軍関係の施設とのことで、廻廊で囲まれた中庭などには入ることができなかったが、廻廊で連なった建物群、その背後の本殿もよく残っていることを確認することができた。建国忠霊廟の様相は、日本本土の神社を忠実にそのまま持ち込もうとした「満鉄附属地神社」とは全く異なった様相を呈していた。その後、建国忠霊廟の設計段階の建築図面の複写を手に入れた。[(1)] 一方、建国神廟については復原図面の作成を試みる機会を得た。[(2)] そこで、建国忠霊廟を中心に建国神廟にも触れつつ、造営の様相について以下に検討したい。

Ⅰ　建国忠霊廟および建国神廟の造営経過

建国忠霊廟と建国神廟の造営経過については既に嵯峨井建、[(3)] 西澤泰彦[(4)] によって報告されているが、

写真１　旧建国忠霊廟神門（現状）

写真２　旧建国忠霊廟拝殿（現状）

表1　建国忠霊廟・建国神廟造営関係年表

年月日	忠霊廟・神廟の別	事　項	出典
1931（昭和6）年9月18日		柳条湖事件、満洲事変はじまる。	
1932（昭和7）年3月1日		満洲国建国。	
1935（昭和10：康徳2）年7月	忠	日満文武官の霊を祀る招魂社建設の議が起り、満洲国招魂社建設準備会設立。	矢、桑
1935（昭和10：康徳2）年8月23日	忠	皇帝に南司令官が建国廟の必要性を示唆（「厳秘会見録」）。	嵯、中
1936（昭和11：康徳3）年1月1日	忠	満洲国招魂社建設準備会決定案を得て、解散。	矢
		同日護国廟建設委員会設立。	
1936（昭和11：康徳3）年3月26日	忠	第1回護国神社建設委員会。	矢
1936（昭和11：康徳3）年4月19日	忠	地鎮祭、第一期工事（本殿および廟務所）。	矢、桑
1936（昭和11：康徳3）年4月21日	忠	第2回護国神社建設委員会（大同大街に平行に、廟は北面）。	矢
5月20日	忠	新京安達部隊測量班より天体測量による本殿位置確認回答。	矢
1936（昭和11：康徳3）年8月20日	忠	「護国廟」から「建国廟」へ。また社殿は北面せず、伊勢皇大神宮に向けるよう変更の通達。	矢
1936（昭和11：康徳3）年9月5日	忠	起工。	概、嵯
1936（昭和11：康徳3）年9月18日	忠	建国廟建立を決定と報ずる（『中外日報』嵯峨井）。	嵯
1936（昭和11：康徳3）年	忠	第一期工事落成（種々の都合で、上棟式も落成式も差控え第二期工事に一括）。	矢
1937（昭和12：康徳4）年4月19日	忠	地鎮祭（ただし、康徳3年の誤りではないか）。	概、各、総
1937（昭和12：康徳4）年	忠	建国廟第二期（拝殿、東西配殿、角楼、神門、廻廊等）工事着工。	笛
1937（昭和12：康徳4）年7月7日	忠	盧溝橋事件（日支事変）、日中戦争はじまる。	矢
1938（昭和13：康徳5）年3月4日	忠	満洲国政府、創設協議会を開催し、建国廟建設についての政府基本方針を協議。（『中外日報』、昭和13年3月11日）	
1938（昭和13：康徳5）年4月1日	忠	第1回協議会で、建国廟建立服務運動を7月に展開することを決定。（『中外日報』、昭和13年4月8日）	
1938（昭和13：康徳5）年7月1～20日	忠	全満青年を対象に「聖汗奉仕」と称して動員をかける（建国廟建立服務運動）。	嵯
	忠	全神代表高階研一視察報告。本殿・廟務所が完成拝殿の骨組みができていた。（『中外日報』、昭和13年7月19日）	
	忠	建国廟、明年9月落成の予定（『中外日報』、昭和13年9月25日）。	
1938（昭和13：康徳5）年10月21日	忠	非公式で上棟式	矢、概、各
1939（昭和14：康徳6）年5月12日		ノモンハン事件	
9月停戦協定			
1939（昭和14：康徳6）年9月12日	忠	建国廟も殆ど完成し、明年秋を期して遷座祭を執行する予定。（『中外日報』、昭和14年9月12日）	
1940（昭和15：康徳7）年2月初	神	東京にて、藤島、矢追、内務省神社局並神宮司廳その他関係者と協議。	矢
1940（昭和15：康徳7）年2月9日	神	地鎮祭（ただし、3月9日の誤りではないか）。	各
1940（昭和15：康徳7）年2月17日	神、忠	「天照大神を御祭神に新たに『神廟』を創設／御祭神問題解決す」と報ぜられる。（『中外日報』、昭和15年2月17日）	嵯
1940（昭和15：康徳7）年2月27日	神	総理官邸で、東京での協議事項を中心に準備方針を決定。	矢
1940（昭和15：康徳7）年3月9日	神	地鎮祭、神殿工事着工	矢
1940（昭和15：康徳7）年3月20日	神	本殿立柱式	矢、各
	神	上棟祭	
1940（昭和15：康徳7）年5月28日	神	竣工	矢
1940（昭和15：康徳7）年6月22日～7月10日		皇帝薄儀訪日	
1940（昭和15：康徳7）年7月15日	神	建国神廟創設	矢
1940（昭和15：康徳7）年8月22日	忠	建国忠霊廟創設	矢
1940（昭和15：康徳7）年8月24日	忠	建国神廟の摂廟として創設せられる旨布告。	各、十
1940（昭和15：康徳7）年9月17日	忠	9：00神殿浄祓の御儀、10：30御歴代奉安の儀。清祓祭。	矢、概
1940（昭和15：康徳7）年9月18日	忠	20：30殉国烈士の忠霊を鎮祭。鎮祭の儀。	矢、概
1940（昭和15：康徳7）年9月19日	忠	11：00親拝の儀。	矢
1940（昭和15：康徳7）年9月20日	忠	10：00謝神の儀。	矢
1941（昭和16：康徳8）年4月19日	忠	祭祀の大綱規程される（建国忠霊廟祭祀令：勅令第39號）。	十

忠霊廟・神廟の別の凡例
忠：忠霊廟、神：神廟、無印：直接両廟に関係ない重要事項
出典の凡例
矢：矢追又三郎、「建国神廟　建国忠霊廟」（『満洲建築雑誌　第23巻』、昭和18年1月）
桑：桑原英治、「政府の営繕事業に就て」（『建設年鑑　康徳十年版』満洲帝国協和会科学技術連合部会建設部、1935年11月）
嵯：嵯峨井建、「建国神廟と建国忠霊廟の創建――満州国皇帝と神道――」（『神道宗教　第156号』神道宗教学会、平成6年9月）
中：中田整一、『満州国皇帝の秘録』、（幻戯書房、2005年9月）
概：「建国忠霊廟造営工事概要」（『満洲建築雑誌　第21巻　第1號』、満洲建築協会、1941年1月）
各：満洲国史編纂刊行会、『満洲国史』各論、満蒙同胞援護会、昭和45年6月
総：満洲国史編纂刊行会、『満洲国史』総論、満蒙同胞援護会、昭和45年6月
笛：笛木英雄「業界の今昔」（『満洲建築雑誌　第22巻　第11號』、満洲建築協会、1942年11月）
十：満洲帝国政府、『満洲建国十年史』、原書房、昭和44年3月

追加すべき点や修正すべき点もあり、造営経過に絞って以下に再度検討してみたい。両廟の造営経過に関わる事項を中心に時系列に整理したものが、表1である。

建国忠霊廟の創建の具体的動きは、満洲国建国3年目になる1935（昭和10：康徳2）年に始まった。矢追又三郎の「建国神廟　建国忠霊廟」[5]によると「建国の聖業に殉じた日満文武官の霊を祀る招魂社建設の議が起り」、1935年7月、軍政部[6]の佐々木最高顧問[7]を委員長に「満洲国招魂社建設準備委員会」が発足した。[8]幹事は当時の総務廳需用局営繕処設計科長兼監理科長の相賀兼介が担当した。同年9月までに5回にわたる幹事会を開き決議書を作成した。同年11月、総務長官主宰の下に日系の各総務司長などからなる定例事務連絡会議（通称「水曜会議」）に決議書は提出され、翌1936（昭和11：康徳3）年1月1日に準備委員会の最終決定案を作成すると同時に、準備委員会を解散し、同日「護国廟建設委員会」を設立した。[9]

これに先立つこと、前年の8月23日の満洲国皇帝溥儀と南次郎全権大使（関東軍司令官）との定例会見において、その会見の会談内容を秘かに記した『厳秘会見録』[10]によると、皇帝溥儀と南大使との間で次のようなやり取りが行われている。

「大使、国民ノ思想統一ニ就テハ建国日尚浅イ満州国ニ於テハ特ニ心ヲ致サネハナラヌト思ヒマス其レニツイテカンガヘテ居ルコトハ満洲国ニモ国家ノ為犠牲トナッタ人々ヲ祀ル社カ必要ト思イマス、例ハ日本ノ靖国神社ノ様ナモノテアリマス、其名前ハ満州国ニ適当スル様例ヘバ護国廟トカ何トカ適当ナ名ヲ付ケ皇帝閣下自ラ之ニ参拝セラレ学校生徒及官民カ之ニ参拝スル様ニスレハ国家ノ為犠牲トナルモノモ満足シ遺族及郷党ノ名誉トナリ国民思想統一ノ上ニ大切ナコトト思ヒマス……」

「帝、誠ニ結構テアリマス、此ノ精神カ根本テアリマス、大使ハ日本ノ　陛下ヲ代表セラレ自分ハ日本ノ　天皇陛下ノ御心トスルノテアルカラ満州国ノ満人官吏ニ就テ御気付ノ点カアリマスレハ腹蔵ナク直接自分ニ申出ラレ度イ、又自分ノ気付イタ点ハ遠慮無ク大使ニ申シマス……」

すなわち、南関東軍司令官は、国民の思想統一を図るために、是非とも靖国神社のような、建国の犠牲となった人々を祀る護国廟を創建することが大切だとしている。これを受けて皇帝溥儀は、誠に結構でありますと答えているのである。時は、軍政部佐々木最高顧問を中心に「招魂社建設準備会」を発足させた翌月のことである。このとき既に招魂社ではなく、護国廟という名称が使われていることも注目に値しよう。

招魂社建設準備会のあとを受けて1936年1月1日発足した護国廟建設委員会[11]は、造営方針や様式祭祀の方法など実施計画の審議機関であった。営繕需品局長笠原敏郎を委員長に発足し、学識経験者として南満洲工業専門学校長岡大路、同校建築学科長村田治郎[12]が臨時委員として参画していた。[13]

1936年3月26日、第一回護国廟建設委員会が営繕需品局長室で開かれた。第一回委員会では、「祭祀方法に関する件」、「造営計画に関する件」などが決議されている。

同年4月19日、地鎮祭が挙行されており、第一期工事の本殿と廟務所に着手したものと思われる。地鎮祭には建設委員ならびに来賓として国務総理大臣ほか各大臣や東條英機関東軍参謀長をはじめ多数の高官が参列した。[14]

2日後の4月21日、第二回護国廟建設委員会が開かれた。第二回護国廟建設委員会では、「設計内容竝様式に関する件」が決定された。しかし、祭神・祭祀方法が難航するなか、[15]さらなる検討に意味がないとのことで、「護国廟建設委員会」は2回開かれたのみで、以降は笠原局長の指導の下に進められることとなった。[16]

その後、護国廟建設委員会の既決定に基づき、大同大街に平行に整地築山が半ば出来上がった同1936年8月20日付で、国務院総務廳長より名称を「護国廟」から「建国廟」に改正するとともに、廟は北面とせず伊勢皇大神宮に向けるようにとの通達があった。本殿位置および皇大神宮への角度を新京安達部隊測量班に依頼し、その結果に基づいて真北から西へ46度54分38秒に軸線を据え、南東方向の皇大神宮に向けることとなった。[17]これにともない敷

地を後方に拡張し、敷地の整地築山工事をやり直すこととなったが、一期工事は同年内には完成したのではないかと思われる。祭神が未決定なこともあり、上棟式も落成式も行わず、第二期工事に一括して行うことになった。[18] 一方、第一期工事がほぼ完成に近づいていたころになって、日本国内には1936年9月18日付の『中外日報』[19]で初めて、満洲国に建国廟が建立されることが伝えられている。

1937年4月19日に地鎮祭が行われており、[20]このころ第二期工事（拝殿・東西配殿・角楼・神門・廻廊等）に着工したようだ。[21] 第二期工事着工まもなくの1937年7月7日に盧溝橋事件が引き起こされ、建設材料・労賃が高騰し工事に難渋をきたしたようだ。[22] 1938年3月4日付で『中外日報』は、創設協議会を開催し、建国廟建設の満洲政府の根本方針を協議したと伝えている。1938年4月1日には、満洲国建国廟および宮廷府御造営服務国民運動第一回協議会が開催され、建国廟建立服務運動を7月1日から20日間挙行することを決定し、「聖汗奉仕」と称して全満洲から青年を建国廟建設の労働奉仕に動員した。[23] 1938年7月19日付の『中外日報』の高階全神代表の満洲国からの帰国報告記事によると「本殿と廟務所が既に完成し目下拝殿の骨組が出来てゐるから総ての完成も間近と思う」とあり、建国廟が完成に近かったことがわかる。1938年10月21日には、営繕需品局内の関係者によって非公式の上棟式が実施された。これに先立つ1938年9月25日付の『中外日報』によると「建国廟の創建は着々進捗し既に本殿その他の建築を終り明年九月落成の予定と成っている」とある。また、1年ほど後の1939年9月12日付の『中外日報』によると「建国廟も殆ど完成し、明年秋を期して鎮座祭を執行する予定となっている」とあり、1939年中には建国忠霊廟は完成したのではないかと考えられる。

第二期工事が完成したにもかかわらず、当初からくすぶっていた祭神問題が解決せず、祭祀形式も決まらない状態であった。ここに至り、天照大神と英霊とを分離し、英霊を祀る建国忠霊廟を摂廟とする天照大神を祀る建国神廟を新たに設けることで決着することになる。ところが、摂廟より神格の高い天照大神を祀る建国神廟の遷座を先に行わねばならぬこととなり、急遽建国神廟の建設を図ることになった。[24]

1940年2月初旬、建築局第二工務處長藤島哲三郎と矢追又三郎の両名が来日し、建国神廟について内務省神社局や神宮司廳など関係機関と協議の上、設計を神社局に依頼している。[25] 1940年2月17日付『中外日報』は「建国廟は建国の功労犠牲者を奉祀し我国の靖国神社に準ずると共にこれとは別に新たに天照大神を御祭神とする『神廟』を宮廷址の一角に御造営することとなった」と伝えている。2月27日には、満洲国総理官邸で藤島・矢追両氏による東京での協議事項を中心に審議し、祭祀・予算・建築など建国神廟建設準備方針を決定している。[26] 3月9日には地鎮祭を挙行し、神殿工事に着工。3月20日に本殿立柱式。上棟祭を挟んで、5月28日にすべてが竣工している。その間、工期はわずかに2カ月半ほどである。

そして、6月22日から7月10日にかけての皇帝溥儀の2度目の訪日が行われた。溥儀帰国後、7月11日に建国神廟創建案は国務院会議で可決され、翌12日に参議府会議を通過し正式決定されている。

7月15日未明に建国神廟の鎮座祭が行われ、建国神廟は創建された。

建国神廟の創建が終わった1940年8月24日、建国忠霊廟[27]が建国神廟の摂廟として創建せられる旨の布告がなされ、ここに晴れて、建国忠霊廟は建国の功労犠牲者を祀る日本国における靖国神社に相当する施設として正規に位置づけられることになった。

鎮座祭は1940年の満州事変勃発記念日の9月18日より3日間をかけて行われている。

鎮座祭に先立つ9月17日には新殿の清祓祭が行われ、次いで橋本虎之助祭祀府総裁は皇帝溥儀から授けられた霊代を本殿に安置している。[28]

鎮座祭初日の18日は英霊を神鎮めるための鎮祭である。夜間に遺族をはじめ500名ほどの参列のもと、祭祀府総裁ほか祭官によって執り行われた。2日目の19日は皇帝自らが参拝する親拝の儀である。当日の参列は拝殿内および廻廊にかけて1,600名ほど、さらに神門外の外庭には満日軍の代表・協和会

代表などが加わった。3日目の20日は神霊を慰撫する謝神の儀である。神前において振鉾・万歳楽・陵王・長慶子などの舞楽や武道などの奉納があった。[29]

この鎮座祭に奉祀された祭神は満洲国側が4,264柱、日本側が19,877柱、あわせて24,141柱であった。

Ⅱ　建国忠霊廟の設計から実施へ

1935年7月に設立され、翌年1月に解散した建国忠霊廟建設に関する最初の具体案を提出すべき「満洲国招魂社建設準備委員会」は、軍政部佐々木最高顧問を委員長に、造営関係として総務廳需用處営繕科長の相賀兼介が幹事を務めている。「満洲国招魂社建設準備委員会」が取りまとめた、最終案での設計大綱は以下のようであった。

(1) 建設の目的、(2) 建設地〔ほぼ実施地〕、(3) 規模、(4) 様式〔建設目的に副うように広く東洋建築の権威者の意見を徴すこと〕、(5) 名称、(6) 霊域、(7) 所要経費〔継続工事経費140万円〕、(8) 建設計画年度割〔康徳3年より3ケ年〕、(9) 廟方向〔北西面とし、将来の宮廷に向ける〕、(10) 祭祀方法〔日本の靖国神社の例に準じる〕、(11) 実施分担〔イ.軍政部：一般統轄事務、ロ.文教部：祭祀研究、ハ.総務廳需用處：設計施工〕

「招魂社建設準備委員会」を引き継ぎ、1936年1月に「護国廟建設委員会」は設立された。このとき早くも、招魂社から護国廟に名称が変更されている。営繕需品局長笠原敏郎を委員長に、営繕處長内藤太郎を委員兼幹事長に、前準備委員会幹事であった設計科長兼監理科長の相賀兼介が幹事となり、営繕需用局を中心に、各関係者を網羅して「護国廟建設委員会」は構成されている。構成メンバーから見てこの「建設委員会」は先の軍政部中心の「準備委員会」と異なり、建築関係技術者中心の実務的委員会である。さらに東洋建築の権威として、当時南満洲工業専門学校の校長岡大路、同教授村田治郎が臨時委員として参加している。「護国廟建設委員会」は2回開催されている。

「第一回護国廟建設委員会」は1936年3月26日に開催され、以下のようなことが決議されている。

(1) 議事内規に関する件、(2) 祭祀方法に関する件〔この件につき4項を決議したようだが、祭神問題がおこり、すべて白紙に戻される〕、(3) 造営計画に関する件〔イ.廟の方向は大同大街に平行し北面すると決議されるが、後に変更される。ロ.建築様式：「東洋風を高調とし荘重雄大にして国民崇敬の的たらしむ　云々」〕

建築様式については、「東洋風を高調とし荘重雄大にして国民崇敬の的たらしむ」とされているが、岡大路・村田治郎が営繕需品局案を基礎に検討し、参考として平面・断面の略図を提示したようだ。実施設計は営繕需品局員の矢追又三郎を工事股長に、加藤完、奥本一市、田中貞一、黒木春時、川添四郎、加川雅人、植原隆一の日本人技術者があたっている。その設計姿勢は「鉄骨鉄筋コンクリート耐火構造とし、規模の雄大な事は支那風に彫刻絵様や屋根の曲線等は日本風に清々しく、逞ましく、溌剌たる新興気分の横溢に努めた」とある。[30]

「第二回護国廟建設委員会」は1936年4月21日に開催され、以下のようなことが決議されている。(1) 設計内容竝様式に関する件として、〔イ.設計に関しては平面外容構造共に提出案による。ロ.内外仕上の色彩は可成満洲色の表現着色にする。〕などが決定された。

既に記したように、「護国廟建設委員会」は2回で終わり、その後は笠原営繕需品局長の指導の下に工事が進められた。

大同大街に平行に整地築山が半ば出来上がったころ、国務院総務長から1936年8月20日付で「護国廟」を以降「建国廟」に改正すること、および廟の向きを　第一回「護国廟建設委員会」で決定された「大同大街に平行し北面する」から「伊勢皇大神宮に向ける」との変更の通知があった。この通知を受け、急遽、本殿・拝殿・神門・廻廊などの中心伽藍部分の軸線を真北より西に46度54分38秒振って整地しなおしている。

このころの設計段階の状況を示すものが、『建国廟営造概要』[31]だと思われる。『建国廟営造概要』について、頁を順に追って見ていけば、以下のような内容であり、極めて興味深い。

①「建国廟造営概要」（表紙、図書館で追記された記事によると「登記號碼35833、民国36.6.18、吉林省立長春図書館」「山田文英殿寄贈」とあり、山田文英から寄贈された本書を戦後間もなくの1947年に登録していることがわかる）

②建国廟営造概要

「一、建設ノ目的

満洲建国偉業ニ殉職セシ日満文武官其ノ他ノ霊ヲ祀リ之ニ依リ各民族ノ精神的結合タラシム

二、設計計画ノ内容

廟ハ新京大同大街南端南嶺聖域ノ約四十万平方米ニ建設シ、廟ノ方向ハ将来ノ帝宮ニ向ハシメ、其ノ建築様式ハ国民崇敬ノ的タラシムベク東洋風ヲ基調トシタ荘重雄大ニシテ其ノ構造ハ鉄骨鉄筋コンクリート造リトシ、外部ハ花崗石貼、屋根ハ瑠璃瓦葺、軒廻リニ彩色ヲ施シ、内部ハ主トシテ大理石及漆塗仕上トス

廟ノ配置ハ別紙配置図ノ通リ、一般ハ前門ニ於テ下乗セシメ、顕官ハ祭殿内ニ約三百名、文武百官ハ内庭ニ約三千名、軍人学生其ノ他団体ハ外庭ニ約一万五千名参列シ得ル如ク計画ス

其ノ主ナル建造物ハ次ノ如シ

正門　高サ　一三、〇〇米
神橋　幅　一七、〇〇米
長　三〇、〇〇米
廟務所 六四四、〇〇平方米
高サ　九、六〇米
中門　一七五、〇〇平方米
同　一四、八〇米
内門　一九五、〇〇平方米
同　一三、八〇米
廻廊　六二七、〇〇平方米
同　六、〇〇米
東西配殿　五二三、六〇平方米
同　一四、五〇米
角楼　一〇〇、〇〇平方米
同　一一、四〇米
祭殿　九〇五、二五平方米
同　一九、七〇米
霊殿　四九、〇〇平方米
同　一九、〇〇米

三、工事総額

国幣壱百四拾万円整ニシテ康徳三年ヨリ三ケ年継続事業トシ、国費及一般ノ浄財ニ拠リ建設ノ目的ニ意義アラシム」

③「位置図」（新京の地図に建国忠霊廟の敷地をオレンジ色に塗って、位置を示している。）

④「配置図」（彩色された図で、霊殿〔本殿〕・廟務所に赤、祭殿〔拝殿〕に群青色、内門〔神門〕・廻廊・中門などに黄色が塗られている。この時点での1期工事・2期工事などの別を示しているのではないかと思われるが、写真複写が不鮮明なため確認できない。また、真北と45度ほど西に振れた方位が示され、中心施設の軸線がこの方位に平行であることを示している。）

⑤「鳥瞰図」

⑥「霊殿透視図」（本殿の彩色透視図）

⑦「霊殿」（霊殿立面および塀断面・塀立面）、「祭殿」（祭殿・廻廊・角楼立面および東西廻廊断面）、霊殿（断面）・祭殿（断面）・配殿（立面）・内門（断面）、前門（立面）、中門（立面）、内門・南回廊・南の東西角楼（立面）

表2　『建国廟造営概要』『建国忠霊廟造営工事概要』記事対照表

『建国廟造営概要』				「建国忠霊廟造営工事概要」	
敷地面積	400,000m²			敷地面積	456,000m²
正門		高	13.00m	正門柱一面2.7m角	
神橋		幅 長	17.00m 30.00m	昭忠橋は中12.50m長16m	
廟務所	644.00m²	高	9.60m	廟務所	建坪885.35m²
中門	175.00m²	高	14.80m		
内門	195.00m²	高	13.80m	神門	建坪171m²
廻廊	627.00m²	高	6.00m	廻廊	建坪638m²
東西配殿	523.60m²	高	14.50m	西廡 東廡	建坪264m² 建坪264m²
角楼	100.00m²	高	11.40m	四角楼	各建坪25m²
祭殿	905.25m²	高	19.70m	拝殿	建坪843m²
霊殿	49.00m²	高	19.00m	本殿	建坪49m²
前門					
				盥漱舎	建坪16m²

写真3
建国忠霊廟全体配置図
（配置図の左方向が北、『満洲建築雑誌　第21巻　第1号』より転載）

⑧「平面図」（正門・神橋・中門・内門・廻廊・東西配殿・角楼・祭殿・霊殿の平面図、内門前にカットラインが入れられているものの、一直線に配され、中門が1棟分しか描かれておらず、軸線変更前の状態のままに図面を転用していると思われる）

建設の途中段階の様子を示す以上の『建国廟営造概要』と、竣工後まとめられた「建国忠霊廟造営工事概要」[32]の建物を対比して整理したものが表2である。

最も目に付く点は、建物名が変更されたものが多い点であろう。「内門」が「神門」へ、「東配殿」・「西配殿」が「東廡」・「西廡」へ、「祭殿」が「拝殿」へ、「霊殿」が「本殿」へ改変されている。これらの変更はいずれも、神社的な名称への変更だとみられる。また、中門・前門は竣工時にはまだ建てられておらず、逆に盥漱舎は竣工時には建てられたが、計画段階では予定されてなかったこともわかる。計画途中まで予定されてなかったにもかかわらず、予定されていた建物を差し置き、追加建設された盥漱舎は手水舎で、日本の神社には欠かせない建物である。

Ⅲ　建国忠霊廟の様相

建国忠霊廟は新京特別市大同大街南端南嶺聖域に位置していた。敷地は南北に細長い長方形の奥（南）2／5ほどが西に若干張り出しており、面積456,000m²ほどである。張り出し部分は、当初の南北軸から主要建物群の軸線を真北から西へ45度ほど振れた軸線への変更にともなって拡張されたものである。張り出し部分を含む奥の2／5部分はほぼ正方形で、この正方形の南東・北西をむすぶ対角方向を軸に中心伽藍は配されている。敷地北東隅に接する大同大街のロータリー建国広場から斜めにアプローチし、正門を過ぎると緩やかに左に曲がりながら南北軸の参道に入る。参道を進み石造単アーチ橋の神橋（昭忠橋）を渡ると緩やかに右に曲がりつつ、中心伽藍の外庭へ横から入り込むことになる。神門前広場が「外庭」である。神門・拝殿・本殿が一直線に並び、この軸線がはるかかなたの伊勢皇大神宮に向かっている。ほぼ正方形に廻廊で囲まれた中庭が「外院」である。廻廊で囲まれた外院の正面出入

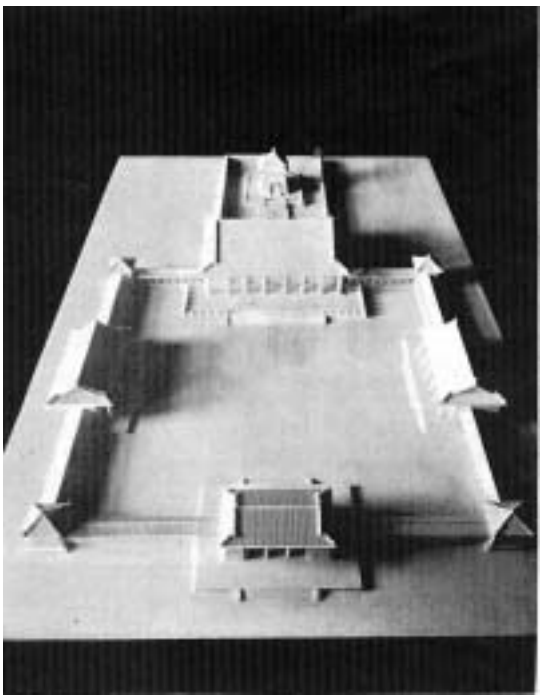

写真4　建国忠霊廟中心伽藍模型（『満洲建築雑誌　第17巻　第11号』より転載）

図1　建国忠霊廟
（本殿・拝殿・東廡・西廡・神門・廻廊）平面図

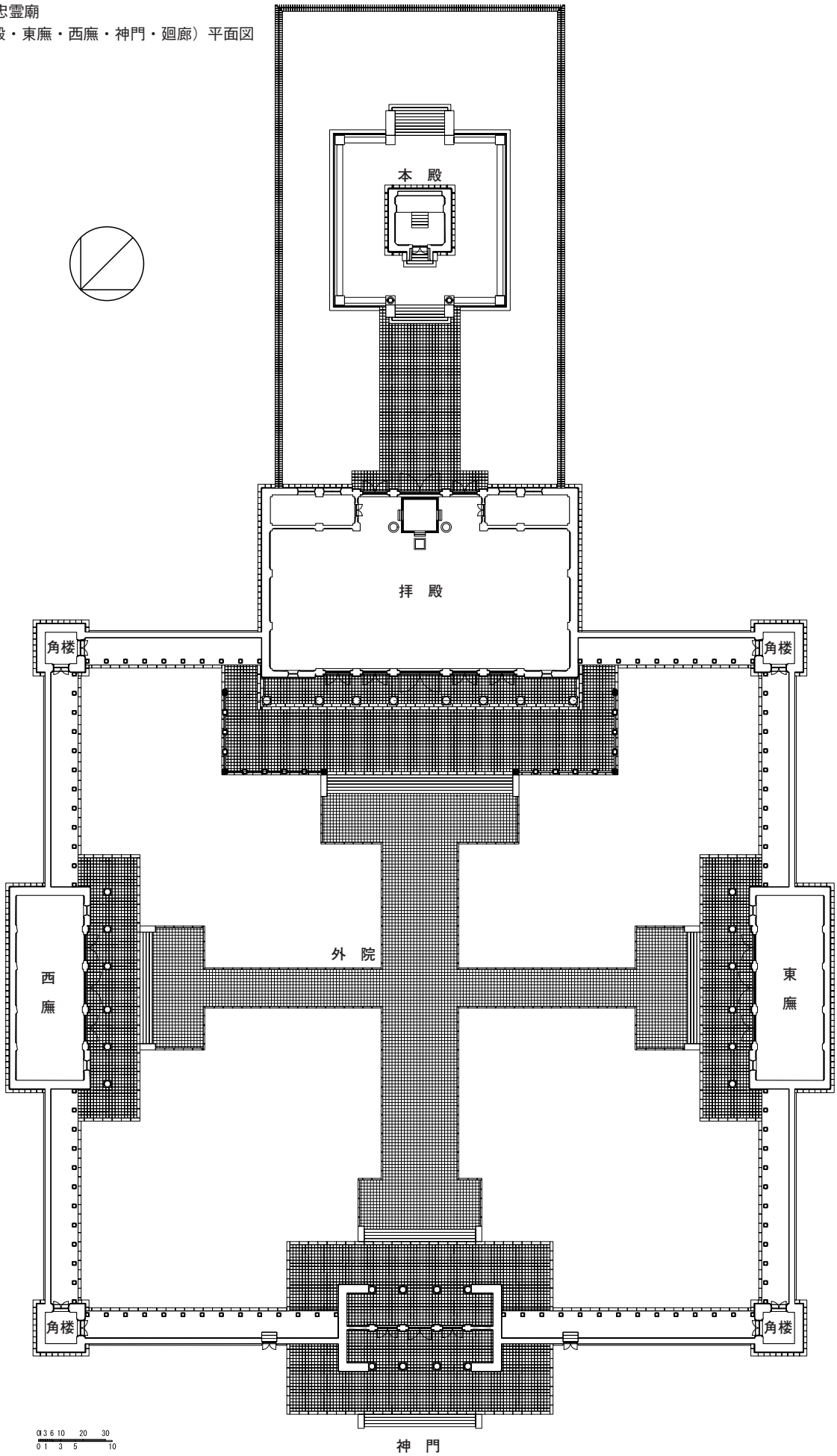

写真5　建国忠霊廟前門（『建国廟営造概要』より転載）

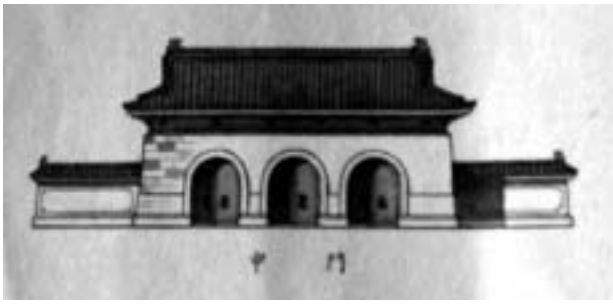

写真7　建国忠霊廟中門（『建国廟営造概要』より転載）

口に神門、奥の突き当りに拝殿がある。廻廊の東西（正確には東北と西南）に東西廡を配し、廻廊4隅に角楼を上げる。さらに拝殿後方に塀で囲まれた塔状の本殿が立つ。

正門は2.7m角の門柱の頂に石灯籠様の柱頭をのせ、脇に抱鼓石を添える。[33]

神門は、正面5間、側面3間の入母屋造で、群青色の瑠璃瓦葺である。正面・背面の両脇1間と側面を煉瓦積の壁体でコの字に固め、正面・背面の中央3間に柱を4本立て並べる。前後の柱列間の中央列の中央3間に観音開きの板扉を開く。鉄筋コンクリート造柱には石が貼られ、柱頭には、石造の大斗肘木が置かれ、軒裏の桁上には肘木を突き出すように据えている。屋根は群青色の瑠璃瓦葺で、これは日本の瀬戸焼瓦組合製である。[34]

東西廡は中心伽藍の中心軸に対して対称で、その位置、平面、外観が酷似する。煉瓦積周石、石敷基壇上に立つ。正面柱間5間で、前方第1列の柱の間に壁がなく、6本の列柱となる。その後方は正面中央3間に観音開きの扉を建て込み、残る外周をコ形に分厚い壁を廻らす。屋根は入母屋、群青色琉璃瓦の本瓦葺。建物名称が設計段階では「配殿」という中国建築的名称から、完成後には「廡」に変えられている。

写真6　昭陵牌楼（『奉天昭陵図譜』より転載）

写真8　昭陵正門（『奉天昭陵図譜』より転載）

拝殿は煉瓦積周石、石敷基壇上に立つ。正面柱間7間で、前方第1列の柱の間に壁がなく、8本の列柱となる。その後方は正面中央5間および背面中央3間に観音開きの鉄製扉を建て込み、残る外周に分厚い壁を廻らす。屋根は入母屋、群青色琉璃瓦の本瓦葺である。内部は中央奥に「祝詞台」が置かれ、その両脇には細長く中央の祝詞台側にのみ出入口がある小部屋が配されている。天井は折り上げ格天井で、壁面・柱・鉄扉などを含め、黒漆で塗って磨き上げた蝋色漆仕上げで、随所を飾り金物で飾っていたようだ。

神門、拝殿、東西廡を結ぶ廻廊は外周に分厚い壁を廻し、内側は丸柱の列柱で飾り、両下造の屋根を掛ける。廻廊4隅に配される角楼は5m四方の規模である。袴腰に分厚く築かれた花崗岩貼の壁体上に宝形造一重屋根を掛ける。廻廊、角楼ともに屋根は

写真9　建国忠霊廟西廡（配殿）
（『満洲建築雑誌　第21巻　第1号』より転載）

写真10　昭陵配殿（『奉天昭陵図譜』より転載）

写真11　建国忠霊廟本殿（現状）

写真12　昭陵牌楼（『奉天昭陵図譜』より転載）

群青色の琉璃瓦の本瓦葺である。

拝殿背後に拝殿の間口とほぼ同じ幅で塀が延び、拝殿とコの字に囲う塀によって本殿基壇を囲っている。塀で囲われた内部後方寄りに正方形の基壇が築かれ、基壇中央に7m四方の本殿が建つ。本殿は塔状で、袴腰に築かれた花崗岩貼の壁体上に二重の屋根を掛ける。屋根は宝形造群青色琉璃瓦による本瓦葺である。

以上のように忠霊廟は、四方に配された建物やそれをつなぐ分厚い壁からなる廻廊や塀で中庭を取り囲み、それらを前後に並べる配置は中国の四合院に通ずる手法である。また、廻廊4隅に角楼を上げ、軸線の東西に配殿を対称的に配する点なども中国古建築に通ずるものであるとして間違いない。

Ⅳ　建国忠霊廟のモデルはなにか

矢追論文によると祭神、祭祀の方法が決まらないなか「奉天昭陵明楼内にある様な碑」が祭祀方法の参考例とされていたとある。これをヒントに昭陵[35]や福陵[36]の建築や配置を見れば、建国忠霊廟と類似点が多いことに気がつく。以下に、昭陵の建築[37]と建国忠霊廟の建築を比較してみよう。

写真5～12に掲げた4組の建物は、左が建国忠霊廟、右が昭陵の建物である。

建国忠霊廟前門（写真5）は二期工事竣工時点では建てられておらず、正門に変更された可能性もある。[38]設計段階では、写真5のようであったことは間違いない。両側の袖壁は昭陵の牌楼にはないが、4本の柱を主体として3つの門を設け、寄棟屋根を中央に高く、左右に低くして二段に配する構成は昭陵牌楼と極めてよく似ている。

建国忠霊廟中門は二期工事竣工時点では建てられておらず、「漸次実施せるゝ方針なり」とされる建物である。[39]その後、建設されたかどうかは不明であるが、設計図（写真7）を見る限り昭陵正門とよく似ている。アーチ門3つが並び、入母屋造瑠璃瓦葺

写真13　建国忠霊廟東廡（『建国忠霊廟鎮座祭写真帖』より転載）

写真15　建国忠霊廟内部（『建国忠霊廟鎮座祭写真帖』より転載）

で、両脇の袖壁を持つ点など極めて類似点が多い。

東西「廡」は二期工事竣工時にこの名称に変更されたが、設計段階では東西「配殿」と称されていた。昭陵や福陵でも同様に「配殿」と称される建物があり、方城（昭陵・福陵では廻廊ではなく城壁で囲まれている）で囲まれた陵の中心軸に対し東西に中軸線に向かって建っており、忠霊廟配殿と似た配置である。忠霊廟の場合は廻廊に組み込まれるように配され、両陵の場合は方城から離れて独立して建っている。そのため、忠霊廟では正面側のみ柱列であるが、両陵では四周に柱列がある違いがあるが、その点を除けば類似しているといえよう。

建国忠霊廟本殿は廻廊で囲まれた中心伽藍のさらに奥に位置し、満洲国建国の犠牲者を祀る建物で、英霊の名前を浄書して納めていた。[40] 昭陵や福陵の碑楼は方城で囲まれた中心伽藍の前方に位置し、石碑を保護するための建物である。このように、両者は配される位置に違いはあるが、その機能はよく似

写真14　建国忠霊廟拝殿（『建国忠霊廟鎮座祭写真帖』より転載）

ている。写真を比較すれば明らかなように、一層部分は分厚い壁で囲まれた閉鎖的な牌などを安置する場とし、その上に瑠璃瓦葺二重屋根を掛けるという構成は似ているといえよう。

そのほか、日本建築にはみられない角楼が忠霊廟では廻廊の4隅に、両陵では方城の4隅に配される点など共通点もある。また、両陵において皇帝・皇后を埋葬した塚の頂部である宝頂と同様な位置に、忠霊廟では本殿を配すなど配置計画にも両陵が参考にされているようだ。[41] 以上のように、忠霊廟は昭陵や福陵がモデルになったと見て間違いなかろう。[42]

Ⅴ　建国神廟の様相

建国神廟は1940年に造営され、1945年に焼失した。わずか5年余の間、存在しただけの神廟である。その神廟は、皇帝溥儀が天照大神を祀るために帝宮内に建てた、日本における伊勢神宮に相当する満洲国宗廟である。[43]

建設経過については既に記した通りである。また、祭神問題、鎮座祭の様子、満洲国崩壊にともなって流転する御神鏡などについては嵯峨井建、島川雅史、外島瀏、八束清貫などの論稿がありそれらに詳しい。[44] ところが、建国神廟の建物については、その実態が必ずしも明らかでなかった。そこで、先に建国神廟の復原を試みたことがある。[45] その際、行った作業を中心に再度、建国神廟の建築の実像に迫ってみたい。

建国神廟の様相を記す文献資料は比較的詳しく記されたものでも、以下のようである。

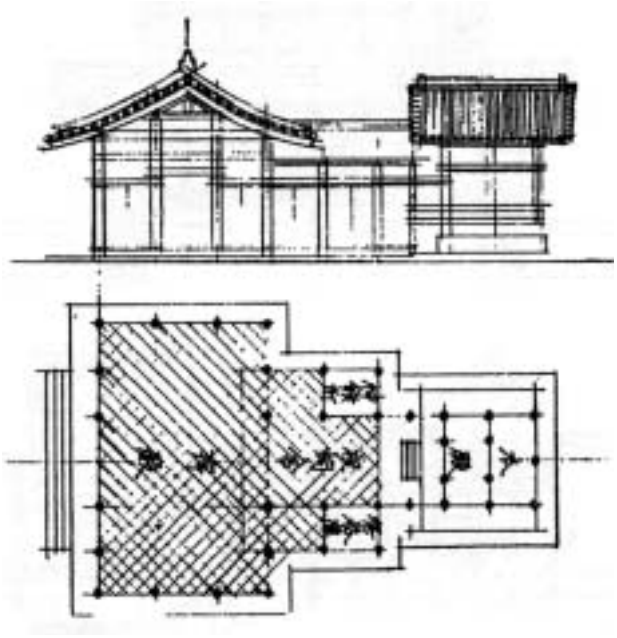

図2　「建国神廟平面機構」（『神社建築』より転載）

「神廟の御本殿は南面し、祭詞殿、神饌所、祭器所及び拝殿等がこれに附属してゐる。周囲は板塀を以て廻らされ、其の正面には白木神明造の鳥居が建設せられる豫定である。御建物は固より仮の御建築であつて、其の様式は白木、銅葺の権現造であり、用材はすべ満洲産の紅松が用ひられてゐる。」（『満洲建国十年史』[46]）

「檜素木造平屋銅瓦葺流造1棟、延面積135平方米、内訳本殿13.0平方米、祝祠殿19.8平方米、祭器庫3.8平方米、神饌所3.8平方米、拝殿95.2平方米の神殿」（「建国神廟、建国忠霊廟」）

当時の資料や証言などをもとに後世まとめられた『満洲国史 総論』[47]によると、「社殿は銅板葺木造、南向き権現造りである。殿内は内陣、祭祀殿、拝殿と続き、内陣以外は石敷で、すべて立札式が採用された。社殿外には神門があり、後には皇帝の命で神門外に木造の大鳥居が建てられた」。

いずれにせよ、これらの資料を総合しても、社殿の様相は、塗装をしない素木の檜や紅松の本殿・幣殿（祝祠殿、祭器庫、神饌所）・拝殿からなる権現造である。また、屋根は銅版葺であり、社殿内部は内陣（本殿）以外の場所は石敷の土足であったことがわかる程度であった。また、従来、通常目にする写真は正面の神門の外から拝殿に向かって写された写真ばかりで、全貌は不明であった。

その後、略平面・略立面があること、板塀越しに斜め前方から建国神廟全体を写した写真があること、正面から拝殿全体を写した写真はあることを知った。

すなわち、略平面・略立面は『神社建築』に「建国神廟平面機構」というキャプションが付けられた挿図（図2）である。[48]その挿図は略平面と側面から見た略立面図で、縮尺・寸法等は記入されていない。斜め前方板塀越しから社殿全体を写した写真は、2002年にNHKで放映された「ラストエンペラー最後の日」のものである。[49]拝殿正面を写した写真は『神道史大辞典』の挿図に使われている。[50]これらの資料と2006年8月に現地で行った礎石の略実測によって作成した礎石図略実測図[51]をもとに、立体的に建国神廟の社殿を復原したものが図3～5である。

本殿は切妻造の妻入で、銅板葺の軒先を少し反らせている。正面間口10尺を柱間3間に分割し、中央間を5尺と広く取り観音開きの板扉を建て込み、両脇間を2.5尺として板壁としていたようだ。背面は5尺2間の板壁であろう。両側面は6尺2間であり、前方の柱間は観音開きの扉が入っているようで、後方の柱間は板壁である。本殿は高床で、背面を除く三方に切目縁を廻らし、両背面脇に脇障子を立てる。正面には5級の木階が付けられてる。[52]

一方、拝殿は切妻造平入で、屋根は銅板葺の軒先を少し反らせる。正面間口を柱間5間に分割し、中央の3間に観音開きの桟唐戸を建て込み、両脇間は格子窓であった。両側面は柱間3間に分割し、中央間に観音開きの桟唐戸、両脇間を板壁とする。

本殿・拝殿を結ぶ幣殿部分は両下造で、銅板葺。本殿に向かい幣殿右奥を祭器庫、左奥を神饌所にあて、残る部分を祝詞舎にしていたようだ。神饌所などがある側面には格子窓が付けられている。また、拝殿および幣殿部分は土間で石の四半敷である。

本殿は、天照大神を祀っているにもかかわらず、神明造ではない。日本国内ではあまり例を見ない切妻造妻入の本殿である。その本殿と切妻造平入拝殿とを両下造幣殿で繋いだ複合社殿である。

この社殿の設計については、『満洲国史　総論』に「社殿は日本の角南隆の設計に係る」とあるが、内

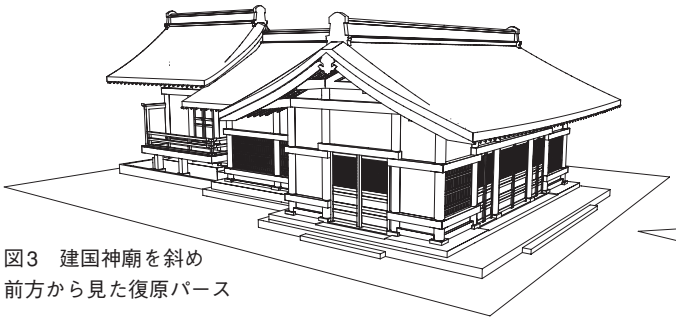

図3　建国神廟を斜め
前方から見た復原パース

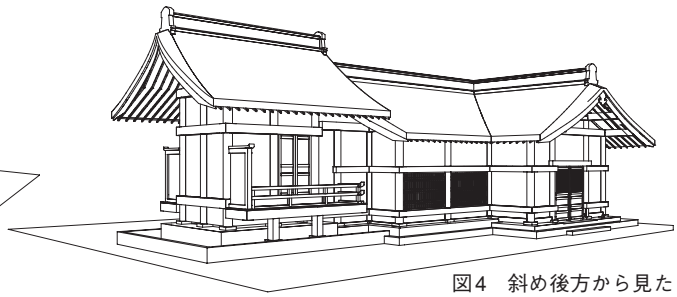

図4　斜め後方から見た
復原パース

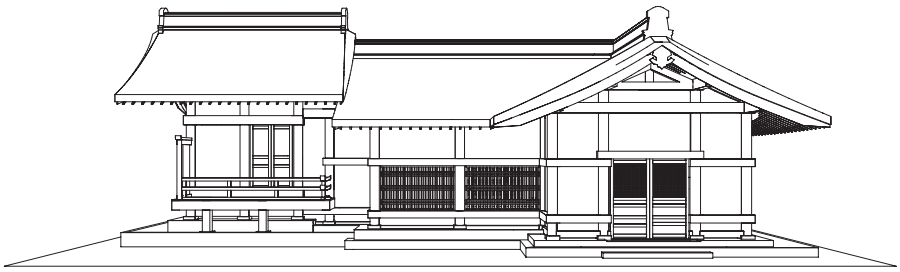

図5　側面より見た復原パース（図3～5はいずれも堀内寛晃の作図）

務省神社局営繕科長であった角南隆の命により、実際には谷重雄[53]が全体責任者となり、図面を引いたのは荻須左兵衛であったようだ。[54]

これらの工事は、清水組が請負、名古屋の魚津弘吉が棟梁として日本人の配下を引き連れて、社殿の木工事を取り仕切った。また、本殿廻りや扉、建具は尾州桧を使用したが、その他は満洲産の材を使用した。銅板は時節柄入手が困難であったため、奉天で銅線を壓延して屋根葺材としたという。[55]

以上のように、建国神廟は、日本国の内務省神社局営繕科員の設計で、施工は清水組が請負、日本の棟梁に頼んで、日本から引き連れて行った大工を取り仕切って造営されたものである。古写真や復原図などを見る限り、中国的な意匠はほとんど見あたらない。寒冷地である満洲の地を考慮して、幣・拝殿を土足にした点を除けば、日本の神社建築をそのまま持ち込んだ意匠だと見て間違いない。

当時溥儀は、天皇と同様な権威を得たいがため、自らの拠り所であった清朝の祖神を祀ることさえ放棄し、天皇家の祖神である天照大神を建国の神として祀り、日本の神道を国教とするなど、過剰なまでに天皇家と同化しようとした。その溥儀が創建した神廟であれば、中国的な要素を混じえず、極めて日本的な建築様式で建てられたことは当然の帰結といえよう。

Ⅵ　建国忠霊廟の建築様式の決定について

建国神廟は既に記した通り、日本国内の神社局の関係者によって設計され、名古屋の宮大工らによって、極めて日本的な建築様式によって建てられた。また、「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」[56]で既に報告したように、神道による現地人の教化を目論む為政者たちの思惑とは異なり、それぞれの現場で造られる神社は日本国内の神社を忠実に再現することに努めていた。そのような状況のなか、建国忠霊廟のみは中国的な意匠で造られている。これはなにに起因するのであろうか。

建国忠霊廟の創建について最初に立ち上げられた「満洲国招魂社建設準備委員会」において、既に建築様式についての指針が明示されている。すなわち、建築様式については「建設目的に副うように広く東洋建築の権威者の意見を徴すこと」と決められている。この決定が、以降の「東洋建築」風の意匠とするという流れを決定的なものにしたと思われる。この準備委員会を主宰したのは、当時満洲国軍最高顧問を務めていた佐々木到一であった。佐々木到一の自伝『ある軍人の自伝』の解説に、橋川文三は彼の生涯を「孫文を知り、彼を敬愛した時代の最後の日本軍人が、それ以降に展開した巨大な日中関係史の

亀裂に激烈な自己解体を強いられ、其の最後の希望を『満洲国』という化構の幻影に託さざるをえなかったという姿である」としている。満洲国軍最高顧問を務めた後、日中戦争のなか第十六師団所属の第三十旅団長として南京攻撃戦に参加し、南京虐殺の当事者となる佐々木であるが、当時佐々木は満洲国軍建設に心血を注いでいた。佐々木は中国通で、孫文など中国国民党要人と親交があり、中国国民革命の同情者であった。しかし、中国革命のなかで済南事件に遭難するなど深い傷を負い、最後の希望を『満洲国』に託したまさにその時期であった。「建設目的に副うように広く東洋建築の権威者の意見を徴すこと」の考えは佐々木の意思であったと思われる。

佐々木の意思を受け継ぎ肉付けしたのが、岡大路・村田治郎でなかろうか。佐々木の「招魂社建設準備委員会」を受けて立ち上げられた「護国廟建設委員会」に臨時委員として両者は参画している。そして両者も参加した第一回委員会において、建築様式を「東洋風を高調とし荘重雄大にして国民崇敬の的たらしむ」と東洋風を高調することが決定された。「局案の検討をお願しました所之を基礎とし、参考として平面と断面の略図を頂戴し」[57]とあるように、両氏から平面・断面の参考図が提示されている。その内容は明らかでないが、先に見たように設計された忠霊廟の建築は、昭陵や福陵の諸施設と共通点が多く両陵を参考にして設計が行われた可能性が高い。設計に先立つこと大正15（1926）年に両氏が中心となり、実測など大規模な奉天昭陵の調査が実施され、忠霊廟が計画される数年前には、大著『奉天昭陵図譜』[58]と『奉天昭陵調査報告』[59]が刊行されている。この調査が、その後の建国忠霊廟の設計に多分に影響をあたえていると思わざるを得ない。特に村田は『奉天昭陵調査報告』を単独で書き下ろしており、その後、自身が出版した『満洲の史蹟』[60]でも、昭陵・福陵に関して詳細な記述がなされ、両陵が大きな比重を占めている。これらの点からみても、「東洋風」の意匠の中心になったのは村田ではないかと判断され、そのモデルが昭陵・福陵であったことが裏付けられよう。

勿論、以上の理由からだけで東洋風の建築様式に決まったわけではない。当初は天照大神も併祀することが考えられてはいたが、建国忠霊廟は単にその他の神社とは異なり、日本人だけでなく満洲国人の英霊も祀るという使命を帯びていたことも当然影響しているとは思われる。また、従来から為政者としては神道による現地人の教化を目論んでおり、それを可能にする現地になじむ様式にするという思惑とも一致した。さらに、満洲国国都新京で盛んに建設されていた中央官庁の様式とも相通ずる点があるともいえよう。

しかしながら、満洲国の神社や建国神廟を検討してきたなかで判断すれば、たとえ建国忠霊廟の様式が東洋風であっておかしくはない状況下であったとしても、それを決定・成立させる契機に佐々木到一を抜きにして考えることはできないであろう。また、設計は完了していたにもかかわらず、極めて中国的な中門や前門が後まわしにされて、二期工事竣工時点では造られず、計画段階では予定されてもいなかった手水舎が急遽造られる。また、中国的名称であった「配殿」などの建物名称が竣工時には日本の神社的名称に改称される。これらの事の成り行きこそ、佐々木到一の満洲国軍最高顧問から第三十旅団長への転出後の建国忠霊廟の状況を暗示しているようにも思われる。

おわりに

以上、満洲国の靖国神社に相当する建国忠霊廟の造営の様相を中心に検討してきた。旧満洲国においては、現地で造られる神社は日本国内の神社の様式をそのまま持ち込むことに終始していた。また、満洲国の伊勢神宮に相当する建国神廟もまた、日本国内の神社局の関係者によって設計され、名古屋の宮大工らによって、極めて日本的な建築様式によって建てられた。そのような状況のなか、満洲国の靖国神社に相当する建国忠霊廟のみは日本人技術者によって造られたにもかかわらず、中国的な意匠である。その契機をつくったのが当時の満洲国軍最高顧問であった中国情報通の佐々木到一であり、その具体的建築様式を主導したのが村田治郎だったのではない

かとした。[61]

その結果出来上がった建国忠霊廟は、日本の靖国神社に相当するという特異な性格の建物であったにもかかわらず破壊されず、いまも残っている。残された理由は不明であるが、中国的意匠で造られたがゆえに、現在の中国の景観のなかでもさして違和感がない。そのことが積極的に壊されなかった原因のひとつであることは間違いなかろう。[62]

中国文化のなかに異文化である日本文化（神道と神社建築）が侵入し、その異文化が持続あるいは変容する事例として海外神社跡地を見れば、また別の観点が見えてくるように思われる。

（つだ・よしき）

【注】

(1) 後に詳述するが『建国廟営造概要』の写真複写を孫安石氏より提供された。

(2) 津田良樹　2007　「幻の『満洲国』建国神廟を復原する」『非文字資料研究』16、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議。

(3) 嵯峨井建　1994　「建国神廟と建国忠霊廟の創建―満州国皇帝と神道―」『神道宗教』156　神道宗教学会。

(4) 西澤泰彦　1996　『海を渡った日本人建築家』東京：彰国社。

(5) 矢追又三郎　1943　「建国神廟　建国忠霊廟」『満洲建築雑誌』23。

(6) 関東軍は満洲国の国防と治安を掌握しており、満洲国軍を皇帝の統率下におき、満系の軍政部大臣および各警備司令官をおいたが、その背後に軍政部顧問部があり、顧問を通じて実質的に国軍を把制していた。最高顧問は事実上軍政部大臣と同様の権限を有していた（満洲国史編纂刊行会、『満洲国史　各論』、満蒙同胞援護会、昭和45〔1970〕年6月。旧満州国関係者を中心に資料と証言をもとに編纂された）。

(7) 当時の最高顧問は佐々木到一である。佐々木は、陸軍大学卒の陸軍きっての中国情報通であった。はじめ孫文を敬愛し、中国国民革命の同情者であったが、激しい国民革命のなかで傷つき、反国民党的立場に転向する。後には南京攻撃戦に参加し、南京虐殺の当事者となる。敗戦にともない戦犯として逮捕され、1955年撫順収容所にて死去。佐々木には『ある軍人の自伝』（勁草書房、昭和38〔1963〕年8月）、『南京攻略記』（『昭和戦争文学全集別巻　知られざる記録』集英社、昭和40〔1965〕年11月所収）などの著書がある。そのほか、佐々木について、戸部良一が『日本陸軍と中国―「支那通」にみる夢と蹉跌』（講談社、1999年12月）において詳しく論じている。

(8) 日本国内では、昭和9（1934）年3月1日、靖国神社で満洲国帝制実施奉告祭が執行され、翌年4月に訪日した皇帝溥儀は靖国神社に参拝している（村上重良『慰霊と招魂』岩波新書、1974年9月）。これらをはじめ、日本国内における以降の招魂社・護国神社政策と建国忠霊廟の造営がどのような関係を持つのか等については今後の課題である。

(9) 前掲注（5）矢追論文。

(10) 『厳秘会見録』は皇帝溥儀の通訳であった林出賢次郎が定例会見における会話をひそかに記録した極秘文書である。ここでは、前掲注（3）嵯峨井論文および『満州国皇帝の秘録』（中田整一、幻戯書房、2005年9月）によった。

(11) このとき委員会に冠する名称が「招魂社」から「護国廟」に変更している。

(12) 東洋建築史の権威、後の京都大学教授。

(13) 前掲注（5）矢追論文。

(14) 前掲注（5）矢追論文および桑原英治「政府の営繕事業に就て」（『建設年鑑　康徳十年版』満洲帝国協和会科学技術連合部会建設部、1935年11月）。

(15) 天照皇大神と建国の英霊との同座合祀案に対し、日本国内の神道関係者から強い反対意見が出され、難航を極めたが、建国忠霊廟には建国の英霊のみを祀り、天照皇大神を祀る建国神廟を新たに造ることで決着する。祭神問題の経過は前掲注（3）嵯峨論文に詳しい。

(16) 前掲注（5）矢追論文。

(17) 前掲注（5）矢追論文。ただし、5月20日付で測量結果の回答があったとされているが、1936年だとすれば正規に変更が伝えられた8月20日以前のこととなり、翌年だとすると二期工事が始まってしまうこととなる。日付は誤記か、あるいは正規の通達がある前に変更が伝えられ、通達以前に測定などの動きがあったのではないかと考えられる。

(18) 前掲注（5）矢追論文。

(19) 明治30（1897）年、真渓涙骨によって京都で創刊された宗教専門紙。

(20) 「建国忠霊廟造営工事構（概カ）要」（『満洲建築雑誌　第21巻　第1號』満洲建築協会、1941年1月）。

(21) 笛木英雄「業界の今昔」（『満洲建築雑誌　第22巻　第11號』満洲建築協会、1942年11月）によると、1937（康徳4）年度着工として「建国廟第2期」があげられている。なお、前掲注（20）「建国忠霊廟造営工事概要」に「起工　康徳3年9月5日」とあるが、まだ一期工事が竣工したかどうかの時期にあたっており、この時起工したかどうかは疑問。

(22) 前掲注（5）矢追論文。

(23) 『中外日報』昭和13（1938）年4月8日。
(24) 前掲注（3）嵯峨井論文。
(25) 前掲注（5）矢追論文。
(26) 前掲注（5）矢追論文。
(27) 「建国廟」から「建国忠霊廟」に改称された時期がいつなのかは、必ずしも明らかでない。祭神が決定された時期あるいは建国神廟の摂廟として創建される旨の布告がなされた時期ではないかと思われる。
(28) 前掲注（5）矢追論文。
(29) 『建国忠霊廟鎮座祭　写真帖』満洲帝国祭祀府総務處、1944（康徳11）年2月。
(30) 前掲注（5）矢追論文。
(31) 前掲注（1）『建国廟営造概要』長春市立図書館所蔵。現時点では原資料を披見する機会にめぐまれず、孫安石氏提供の写真複写による検討しかできなかった。資料には年紀がなく、作成年代は不明である。とはいえ、「建国廟」という名称が使われ、第一期工事で造営されたはずの廟務所の規模が完成後の規模とずれていることなどから見て、「建国廟」と改名され、第一期工事が完成していない、1936年秋の段階の資料ではないかと判断される。
(32) 前掲注（20）「建国忠霊廟造営工事概要」。
(33) 前掲注（20）「建国忠霊廟造営工事概要」。
(34) 前掲注（5）矢追論文。
(35) 昭陵は、清朝2代太宗と孝端文皇后を合葬する帝陵である。奉天（瀋陽市）北方にあって一般に北陵と呼ばれる。
(36) 福陵は、初代太祖と孝慈皇后を合葬する帝陵である。奉天の東方にあって一般に東陵と呼ばれる。
(37) 昭陵と福陵は、建物名称や配置など極めてよく似ている。ここでは主に昭陵と比較しておく。
(38) 前掲注（31）『建国廟造営概要』の鳥瞰図によると前門によく似た門が、竣工時の正門位置に描かれている。竣工時の正門は、大きな2本の柱からなる門で前門の様相とは異なっている。
(39) 前掲注（20）「建国忠霊廟造営工事概要」。
(40) 前掲注（5）矢追論文によると岡・村田の「参考案は本殿の中央に奉天昭陵明楼内にある様な碑が書き入れてありました」とあり、設計当初は碑のようなものを本殿中央に安置する予定で、設計が進められたようだ。
(41) 村田は『奉天昭陵調査報告』（南満洲鉄道株式会社、昭和4年9月）で「配置計画と幾何学的分析」を行っており、この分析をもとに正方形の廻廊や本殿位置の決定などの配置計画に利用したのではないかと思われる。
(42) 村松伸は、根拠等は示されてないが、慧眼にも「建国忠霊廟の意匠のソースはここ（昭陵）にあった」としている（「一九世紀の波、二〇世紀の風、第五章　建築とオリエンタリズム／ナショナリズム」10＋1 No28、2002年6月）。
(43) 建国神廟は帝宮内に創建され、一般国民の参拝は許されなかった。創建2年後の1942年7月15日に新京東南20kmの浄月区に神廟を移し、一般国民も参拝できる施設造営の計画が布告されたが、実現を見るに至らなかった。
(44) 前掲注（3）嵯峨井論文。島川雅史 1984 「現人神と八紘一宇の思想―満洲国建国神廟―」『史苑』43（2）。日満中央協会編　1941『満洲帝国皇帝陛下訪日と建国神廟御創建』。外島瀏　1967『終戦秘録満洲国祭祀府の最後―外山祭務処長手記―』。八束清貫　1967「満洲建国神廟仕末記」神社新報（昭和42年6月3日号）。など。
(45) 前掲注（2）津田論文。
(46) 満洲帝国政府　1969『満洲建国十年史』東京：原書房。
(47) 満洲国史編纂刊行会　1970『満洲国史』総論、満蒙同胞援護会。
(48) 『神社建築』（山内泰明、1967年、神社新報社）所収の「建国神廟平面機構」というキャプションが付けられた挿図である。略平面と側面から見た略立面図で寸法等は記入されていない。挿図の出典などは不明だが、福山敏男の「序」によると、山内氏はかつて内務省神社局にあって全国多数の神社の造営や修理に携わり、戦後神宮司庁に移り営繕部長を務めた神社建築の権威とある。
(49) 原写真は神社本庁所蔵。『教学研究所資料目録1、写真資料目録Vol.1“内務省神社局時代に撮影された神社の景観”』（神社本庁教学研究所、1995年）によると、昭和15年6月6日撮影、建国神廟「2社殿側面より全景」である。内務省神社局時代に当時の営繕科長角南隆らが撮影した写真群である。披見の機会を得たが、複写は許可されなかった。
(50) 『神道史大辞典』（吉川弘文館、2004年）の「建国神廟」の項に収録された写真。原写真は注42と同じ写真群の1枚。「1.拝殿正面」。これらのほか、「3.拝殿屋根」（拝殿の妻面をクローズアップで写す）、「4.拝殿側より中門」（拝殿前から外に向かって中門などを写す）、「拝殿内より本殿御扉」（拝殿内部から本殿正面の木階・扉などを写す）がある。
(51) 略実測を行った礎石は、かつて土に埋もれ、雑草が生い茂った状態であったが、2001年に発掘・整備されたものである。とはいえ、2006年8月現在、再び建物位置には潅木が繁茂し、礎石の全貌を見ることが

難しい状況になっている。
(52) 本殿正面の様子は注（50）の角南隆らが撮影した写真の「拝殿内より本殿御扉」より判明する。
(53) 当時、内務省神社局技師、後に東京都立大学教授。
(54) 前掲注（3）嵯峨井論文。
(55) 前掲注（5）矢追論文。
(56) 津田良樹・中島三千男・堀内寛晃・尚峰　2007「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」、『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議。
(57) 前掲注（5）矢追論文。
(58) 岡大路、村田治郎、伊藤清造編　1927『奉天昭陵図譜』　満洲建築協会。
(59) 前掲注（41）『奉天昭陵調査報告』。
(60) 村田治郎 1944『満洲の史蹟』　座右宝刊行会。
(61) 本論を組み立てるに際し、中島三千男・橘川俊忠の両氏との議論のなかで示唆される点が多かった。記して感謝したい。
(62) なお、本文中の地名など固有名詞は時代状況の把握しやすさを考え、原則として「満洲国」当時の呼称をそのままに使用した。